



神代の楠(蛭子神社)



蛭子神社



用水と交わる場所で下を流れる川(潜り)

霧島市  
じまんばな誌  
③  
宮内原用水

江戸時代に知恵と技を結集して  
荒れ地を美田に変えた大工事。



宮内原用水“鼻んす”

全長12kmにも及ぶ水路

鹿児島神社宮の下を幅3〜4mの水路が流れているのをご存知ですか。小高くなったところを水路は流れ、その両岸には桜が植えてあり、春には絶好の花見スポットとしてにぎわいます。この水路は宮内原用水と呼ばれ、上流へたどっていくと天降川の水天淵という所に突きあたります。ここが用水路の取水口です。下流へたどると浜之市の住吉新田や島津新田と呼ばれる場所を通り錦江湾へそそぎます。総延長は12kmあまりです。用水路ですから、ここに水を引いたことで国分平野の広大な大地が美田に生まれ変わり、米をはじめ、いろいろな農産物がとれるようになったのです。いつ頃造ったかという点、今からおよそ310年ほど前、江戸時代のことです。正徳元年(1711)に天降川水天淵の岩を砕くことから始めて、完成したのが正徳6年(1716)、およそ5年ほどかかっています。今みたいにブルドーザーなどのない時代ですから、全部人力で造っています。しかも、上流から下流までは一直線ではなく、途中に山があったり、固い岩があったり、川とぶつかることもあります。そこで「隧道(トンネル)」を掘ったり、用水路を川の下に潜らせたり、それはそれは知恵と技術を磨いて完成させているのです。



宮内原用水(上部写真の反対側)

語り手 迫良友さん



先人たちが知恵と技を集めて造った宮内原用水を守り継ぐ、宮内原土地改良区の水守人。改良区内の用水の保守や管理を行い、利用される方々の利便を図っている。宮内原用水路近辺の歴史や民俗にも詳しく、にこやかに語る姿に郷土愛が息づく。

「鼻んす」を詳しく見てみよう  
では、宮内原用水にある「鼻んす」を見てみましょう。鼻のように二つの穴がある隧道です。宮内原用水には全部で12ヶ所の隧道がありますが、そのうち9ヶ所は鼻んすのように二穴式のもので、角之下川の鼻んすを見ると、水路が二つに分かれて水が二つの隧道の中を流れていくのがよくわかります。なぜ隧道を二つにしないといけなかったのか？一つは、隧道の強度を保つためです。隧道の上は土がおおっていますが、一穴だとその土の圧力で壊れる恐れがあります。二穴にすると土の圧力が分散されるというわけです。それと、用水路ですから絶えず水をまかなわなければならない。二穴にしておくと仮に一方が使えなくなっても、もうひとつの隧道から流せます。さらに、二穴だと断面が大きくなり、水の勢いをゆるくすることができるとです。当時の人たちはそうした知恵をもって、工事を進めていったのです。

用水路に沿って昔をしのぶ  
宮内原用水が造られた頃は全国的に新田開発がさかんで、鹿児島県内でもいろいろな所で、こうした用水路を造ったり灌がい工事を行っています。この工事に携わった田畑佐文仁という奄美大島龍郷の人は、ここで工法を学び、島に帰ってから奄美大島各地の開田工事を進めています。そうして、この工事が完成してから38年後に、薩摩藩はあの本曾川治水の大事業を命じられることになるのです。本曾川でも、宮内原用水はじめ鹿児島で培った技術が活かされていきます。宮内原用水の取水口である天降川から川の流れて沿って、隧道や西光寺川や嘉例川と交差するところに見られる潜りという技術の跡などを訪ねてみるのもいいでしょう。あるいは、用水路の途中にある蛭子神社、鹿児島神社、隼人塚など歴史ある場所で、遠い昔に思いを馳せるのもいいかもしれません。

立ち寄りスポット



日当山西郷どん村  
西郷隆盛が日当山を訪れた際に宿泊した「龍寶家」を復元した「西郷どんの宿」のほか、レストランや物産館、足湯などがあります。また、観光ガイドの話や屋外プロジェクションマッピングなどを楽しむこともできます。



鹿児島神社  
大隅國一の宮として知られ、山幸彦(ヒコホホデミノミコト)などを主祭神として祭る神社。神代からの歴史と格式が醸す豪壮な雰囲気や、拝殿天井を彩る240点以上の鮮やかな植物画は必見です。旧暦1月18日を過ぎた最初の日曜に開催される初午祭では、背中に飾りをつけた鈴かけ馬が、太鼓や三味線にあわせて踊りながら参詣します。



詳しい地図へQRコード